

## いのちをもたらす真実

ヨハネ 14:1-12

わたしたちは騙されるのがイヤです。たいていの人は騙されたくないのに、なかなか信じません。そして信じないので真実にたどりつけません。

イエスのはなしがよくわからないトマスは質問します。イエスは「わたしを知っているならわかるはず」と答えます。この答えを聞いてフィリポがさらに「御父をお示してください」と質問します。イエスはこう答えます。私のことばが信じられないなら、わたしの行った業（わざ）を信じなさい。トマスもフィリポもイエスを信じていないわけではありません。でもよく理解できない、イエスのことばの意味がわからないので質問しています。

「業を信じろ」いぜんイエスはバプテスマのヨハネの弟子に答えたこと（ルカ 7:18 以下）があります。獄中のヨハネがイエスを疑ってイエスの元に弟子を遣わせたときのことでした。福音書はヨハネが信じたか信じなかったかは記録していませんが、わたしはヨハネはイエスを信じたのだと思います。

トマスもフィリポもイエスを信じているから弟子になったわけです。イエスもそのことは承知しています。でもイエスはただやみくもに信じるだけの弟子を求めてはいません。この意味でトマスやフィリポの質問はイエスにとってうれしい質問です。しかし、イエスの答えはこうでした、父が私であり、私が父である。これはけっしてわかりやすい答え、ことばではありません。

**わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。ヨハネ 14:11**

ここでイエスがいう業とは「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。ルカ 7:22」だけでなく復活のイエスのことも指しています。

キリスト教信者にとって生きるとは信じることです。そして信じるとは知る

ことで深まります。イエスのことをよく知る、さらに深く知る、そのことで  
イエスが悟った真実を知ることになり、真実を信じることにつながります。  
イエスが悟った真実とは告別説教のなかで語られた「わたしが父の内におり、  
父がわたしの内におられる」といういのちのみことばです。

-----